

国立大学法人三重大学学長の評価（業務執行状況の確認）について

令和6年3月15日
学長選考・監察会議

国立大学法人三重大学学長選考・監察会議は、国立大学法人三重大学学長選考・監察会議規程第2条第1項の規定に基づき、学長の評価（業務執行状況の確認）を行いましたので、その結果を公表します。

1. 確認の経過

令和5年度第2回学長選考・監察会議（令和5年6月16日開催）、第3回学長選考・監察会議（令和5年11月24日開催）、第4回学長選考・監察会議（令和6年1月19日開催）において、次の資料及び学長、監事からの意見聴取等に基づき評価を行った。

- ・ 令和3年度計画に対する取組実績
- ・ 令和4年度計画に対する取組実績
- ・ 令和3年度における学長の業務執行状況（監事による監査報告書）
- ・ 令和4年度における学長の業務執行状況（監事による監査報告書）
- ・ 令和3年度国立大学法人ガバナンス・コードの各原則に対する適合状況等
- ・ 令和4年度国立大学法人ガバナンス・コードの各原則に対する適合状況等
- ・ ダイバーシティならびに国際性の進捗状況が確認できる資料
- ・ 臨床麻酔部不祥事再発防止・類似事案未然防止策並びに附属病院新型コロナ対応に関する監査報告
- ・ 所信表明資料

2. 確認の結果

学長の業務は、適切に執行されていると判断する。

委員評価結果

総括意見欄（1/2）

○概ね順調な進捗であると評価できる。残期間も全てに気配りいただき、さらなる高評価獲得を期待する。ただ、目標（ビジョン）について、他大学と比較可能な、出来れば数値を伴うものを取り入れるべきではないかと思料する。企業経営なら、まずは最終利益の増減や1人当たり・1株当りの水準等なのだろうが、それ以外にもSDGs絡みのものやダイバーシティ視点のものなど、多岐に渡る比較が経営者の評価につながる。大学経営にそうした数値目標（ビジョン）が適当かどうかは議論があるとは思いますが、一步踏み出していたきたい。

○就任1年目、2年目に実績について検証し、掲げたすべてのビジョンにおいて順調に執行されていると判断できる。特に、これらのビジョンを達成していく過程において、学長ご自身が大切にされている6つのポリシーに敬服した。今後もリーダーシップを発揮され、地域との共創を掲げ、他者との重層的な連携を強化することで三重大学を発展へと導かれることを期待する。我が国における少子化の進行と、若い人材の都市部への流出は、今後さらに加速化するものと推測される。今後の取組みとして新学部・新研究組織構想、分野横断型大学院組織構想の具現化に期待を寄せるとともに、県外のみならず海外の大学・大学院・研究施設との連携を強め、効率的かつ、より国際化された教育・研究を推進されることを期待する。

○教育面では地域創造教育センターの設置と地域創造教育プログラムの設置、リカレント教育センターのレディーメイド型、オーダーメイド型プログラムによるリカレント教育推進、研究面では、卓越型リサーチセンターおよび重点リサーチセンター、半導体デジタル未来創造センターの設置、みえの未来図共創機構でのスマートビレッジ、医療DXなどのプログラム推進など、教育研究と地域連携が両輪となって、地域共創大学としての三重大学を発展の方向に導かれていると感じる。また運営面では、ダイバーシティ・インクルージョンおよび学長がバナンスの推進、さらには学長・理事ミーティング、学長・部長ミーティング、全学マネジメント会議/談話会、経営戦略会議、オフサイトミーティングなど、三重大学を運営される方々が一丸となって全員で考え、自立する体制や縦割りを是正する体制を整えられつつあり、成果も次第に出つつあると思われる。これらの取組みは、学長としての業務執行状況として、十分に評価に値するものと思われる。今後とも、伊藤学長のチャレンジングな精神と実行力を維持され、三重大学をより良い方向に導いていただければと期待する。

○新型コロナウイルス感染症が依然猛威を振るう中、2020年度に発覚した附属病院の臨床麻酔部の不祥事対応に追われる苦難の船出となったが、学長としての明確なビジョンの開示、公約どおりの全学マネジメント会議の設置と実践的運営、実効性のある研究活性化施策、新規の教育研究センターの設置等の学内組織改編等において強力なリーダーシップを発揮されたことは非常に高く評価できる。理事、部局長、副学長、部長とも密に連絡をとり、周囲の意見を入念に取り入れ、決してトップダウンの一方通行ではない、非常に風通しの良い大学運営を行っておられるという印象である。教育・学生支援、研究、社会貢献、SDGs、管理運営・経営、危機管理の全てにわたってバランスよく注力されていたと思われるが、中でも三重大学の特色を生かした研究の活性化に対する情熱と実行力が個々の大学構成員にわかりやすく伝わっていることは本当に素晴らしいと感じる。明確なビジョンを持って、端的な説明を行いながら、絶えずエネルギーに、かつ明るく行動され、令和3、4年度は申し分のないスタートを切られたと評価できる。

○コロナ禍により活動・行動に様々な制限がある中、大学としての基本である教育と研究に大きな支障や遅延が生じないよう様々なことに迅速に対応いただき、学長のリーダーシップを基にした組織運営の成果を感じる。また、そのような困難な状況においても、リカレント教育センターや半導体・デジタル未来創造センター、新リサーチセンターの設置等、社会情勢を見据えた組織改革に取り組み、現状にとどまらない成長の礎が三重大学ビジョン2030の制定と共に着実に形成されている印象である。これら教育・研究を推進するための組織体制の積極的な改革に加え、オンラインシステム活用による効率化やDXによる大学全体の管理・運営強化等の職場環境の改善に努めるとともに、みえの未来図共創機構の設置、男女共同参画やダイバーシティ・インクルージョン推進によるSDGsへの貢献、新型コロナウイルス感染症対策、附属学校および附属病院の機能強化等、地域社会における三重大学のプレゼンスを高める種々の取組みもあり、大学の発展・醸成に期待を感じる組織運営が遂行されている。

○伊藤学長の今までのパフォーマンスは素晴らしく、高く評価できると考える。次期以降も同じように強い決意と情熱を持って改革に臨んでいただきたい。

○ビジョンA～Fの全ての項目において、確実に実行し、推進していることが確認でき、就任の2年間について、業務が順調に執行されていることが確認できる。特に、管理運営・経営において、「三重大学ビジョン2030」を制定し、三重大学の進む方向について明確にした点が評価される。ともすれば各部署がバラバラに活動し、大学全体の力が弱まる場合があるが、目標を共有することで、そのような弊害が生まれることなく、全体として力を発揮できる環境が整えられたことが、評価に値する。また、ビジョンには示されていないが、キャンパスの整備についても評価に値する。学生の食堂（地域共創プラザ）や正門の整備を計画し、ホームページの改編とともに、キャンパスのイメージを向上させ、三重大学のイメージの向上に貢献した。以上のように、業務の施行について、リーダーシップを発揮し、順調に執行していることが確認でき高く評価できる。今後さらなる業務の推進を期待する。

○新型コロナウイルスという今までに経験したことのない苦難を乗り越え、組織改革や研究環境整備を積極的に推し進める姿勢は高く評価できる。特に世界を意識した外向きの姿勢を全学的に打ち出したことは学内教職員の意欲向上に有効であると思われる。

○地域との共創を実現するための取組みを真摯に実行していただいていると感じる。三重大学ブランドの向上のため、新しい教育研究組織の創設に期待している。

○伊藤学長のリーダーシップの下、様々な改革を着実に実行されていることに敬意を表す。教育・研究・社会貢献の目標達成に向けて、学内外の連携・協力を強化し地域社会や産業界との連携を推進しており、産業界としても、今後の成果に大きな期待を寄せている。また、国際化に関して、「グローバル」を掲げ、国際交流協定校や海外の研究機関との連携を拡大し、留学生の受け入れや海外派遣を増やしていることも、今後成果を上げていくものと期待する。

経営・運営に関して、国立大学がバナンスコードに基づき、経営協議会や教育研究評議会などの組織運営を着実に改善していることも高く評価できるが、ダイバーシティ・インクルージョンについての具体的な取組みの推進はまだまだのように感じる。「未来を拓く・個性豊かな・世界に羽ばたく地域共創大学」の実現に向けては、重要なポイントであり取組みの加速を期待している。

総括意見欄 (2/2)

- コロナ禍への適切な対応や、研究支援体制に関わる新たな制度の意欲的な導入、地域社会の課題に対する具体的・積極的な貢献に関する対応の明確化など、その活動は高く評価することができる。一方、大学の最も根幹をなす学部学生の教育という点について、部局の教員数の減少という事態を踏まえつつ、これまでの水準をどのように維持しさらに充実させていくのかにも、今後注力していくことが望まれる。
- 三重大学 one team として様々な活動に取り組むという視点から大学運営を推進し、「みどりのアントレプレナー共創拠点」のプロジェクトなど、着実に成果を挙げつつある点は高く評価できる。ただ個別のプロジェクトが育つ基盤ともなるような、研究・教育のいわば日常業務の体制を継続的・長期的にどのように整えていくかという点は、少なくとも「執行状況の確認表」等の資料からは見えてこない。
- 令和3年4月の学長就任早々に「地域共創に向けた6つのビジョン」を掲げ、続いて令和4年には、三重大学の目指す将来像「三重大学ビジョン 2030」を取りまとめ公表したことは、教職員及び学生に学長の考え・思いを明示し大学の進むべき方向性を明示したという点で評価できる。
- 「三重大学ビジョン 2030」の中で地方自治体の立場からは、これまで以上に地域における産官学の連携を強化すべく「みえの未来共創会議」を立ち上げたこと、5つの地域共創展開プロジェクトの本格始動、地域拠点サテライトの機能向上、85件の地域課題発見プロジェクトの実施などについて、今後のより大きな成果実現への期待を込めてではあるが高く評価できる。
- 地域社会との連携という点で社会経済情勢の変化に応じてリカレント教育センターを設置し具体的取組みを実行していること、県内一の機能を有する附属病院の役割をさらに果たすべく、そして多くの県民が望むであろう、がん治療の充実強化のための総合がん治療センターの設置や、脳卒中・心臓病など総合支援センターの設置についても高く評価できる。期待される十分な機能・役割を果たされることを望む。また、新型コロナウイルス感染症対策については、全国的に見れば大学附属病院であっても期待される役割を十分に果たさなかったと指摘される大学もある中、三重大学は学長のリーダーシップの下、その役割を果たしたものと思われる。
- 管理運営について全学マネジメント会議・談話会を設置し発言しやすい運営を行ってきたこと、理事ミーティングの毎週開催やオフサイトミーティングの開催などについては時間を要し多くの労苦を伴うものと考えられるが、学内の円滑なコミュニケーションを図ることにより「地域共創ビジョン」「三重大学ビジョン 2030」を共有・浸透させ、大学の新たな課題・問題（多くの現場との話し合いの中からは把握が難しい問題、例えば仔細であるが多くのセクションに共通する問題など）、改善・改革のアイデア・創意工夫などを見つけ出す可能性のある非常に重要な取組みであり、「現場を大切に」し、「意見調整を十分に行う」、「情報をオープンにする」というポリシーを掲げ実行する学長の姿勢を高く評価する。また、病院の臨床麻酔部の不祥事などへの適切な対応、再発防止策の着実な実施、麻酔科の再建や再建中の手術数の維持などは評価に値する。
- 教育・学生支援について教育・研究に特段の知見を有するものではないが、「科学的地域環境人材育成」「半導体・デジタル未来創造センター」などのように、国や社会、国際社会の変化に応じて求められる人材の育成に向けて前向きに取り組まれていることは、卒業生の活躍を期待しつつ、一定の評価ができる。また、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けた学生への授業料免除支援、「食」などの修学支援など、時宜を得た機敏な対応であり、障害学生支援なども学長の「思いやりを大切に」するポリシーの現われと思われる。その他、多くの取組みについても、少なくともマイナス評価と思われるものはない。今後も伊藤学長には、6つのポリシーのとおりリーダーシップを発揮して「未来を拓く・個性豊かな・世界に羽ばたく地域共創大学」の実現に向けて、ご尽力いただきたいと思います。
- 学長就任以来、計画に沿って着実に事業を推進されている姿は評価できるところであり、特にコロナ禍の経験を十分に活かし、積極的に各事業に取り組まれている様子は頼もしく感じる。今後の更なるリーダーシップに期待している。